

地域の動物 医療をささえて



のっぽ動物病院

院長

永田浩之さん

親しみやすく愛される動物病院に。病院の名称にも思いを込めた。柔和で優しい語り口、動物への強い愛情を訴える永田さん、実は190センチ近い威丈夫でもある。失礼ながら、のっぽ動物病院は院長の姿そのものだったと言ってもいい。

「昔からそんなあだ名もつけられていましてね。それも悪くはないなと思ってましたから」。開業する際、親に病院名を相談したところ「安易でいい加減、そんな名前でもいいの」と、こころよい返事はなかった。普通の玉縄動物病院だとか、永田病院とかが常識だろうといわんばかり。

変わった名前の動物病院だな、と思って来院する人たちも、院長の立ち居ふるまいを見て、名前の由来はすぐに納得することになる。

中学生で獣医師を宣言

現在地はかつて母親が美容院を開業していたところで、永田さん自身も幼少期からずっとこの地で育ってきた。当時から犬や猫の動物たちに囲ま

れ、動物との接触は結構濃密だった。

「そんな環境だったこともあるのでしょうか。将来は動物とかかわる仕事につきたいな、とっていました」。すでに小学校の高学年になると、獣医へのあこがれをもち、中学の卒業文では「将来、必ず獣医師になる」と宣言したほどだった。

5歳上の兄が大学受験する際にも、寄せられる学校案内のなかに、獣医科がないか、眼を皿のようにして眺め見た。獣医学部をもつ私立大学は全国に5つしかない狭き門で、獣医師の国家資格を取得するより、獣医学部に入学することの方に、苦勞するのが現実だったという。

動物治療への情熱

昭和 63 年に北里大学大学院を卒業する。動物病院開業の夢を断念したわけではないが、卒業後の職場は横浜市役所の職員。

「横浜市は野毛山や金沢ズーラシアなどの動物園があり、ことによるとそっちのセクションに回してもらえると思って」。いろんな動物とかかわれ、病気の治療が出来る、そんな思惑もあったからだ。



しかし、実際は宮仕えの身で思ったようにはならず、それならばと一念発起、小学生のころから目標にしていた、獣医師として開業する方向へ転身する。「正直迷いました。本当にやっていかれるのか。勤めて 3~4 年、誰もがぶつかるようなカベかもしれませんが、市の職員を続けていくことは、かつて自分が思い描いていたこととは違うんですね」。両親の反対もあったりしたが、動物病院への勤務医としての生活をスタートさせた。

動物病院の勤務医時代、市役所の職員としては行くこともなかった野毛山動物園で、臨床の勉強をする機会に恵まれた。動物園での現実には治療行為が大変難しいことだった。「注射を1本打つんでもカンガルーにけ飛ばされたり、何とかしようと思っても、ニシキヘビなどは、弱ってきたら確実に死んでいくだけ。なかなか治療は出来ないんですね」。動物園の生き物を病気から救ってやるには、病気にならないように、しっかり予防をすることが中心。市役所を退職した後に、動物園での治療の難しさ、無力さをあらためて体験したりもした。



かつて母親が美容院を開業していた同じ場所で、のっぽ動物病院を開業したのが平成11年の5月、間もなく創立15年目の節目を迎える。「本当にあっという間でした。幸いにも玉縄地区の人や藤沢、戸塚方面からも患者さんがたずねてこられます。ワンちゃんネコちゃんをはじめとして、ハムスター、ウサギ、モルモット、トリ、それにカメなどもきました。自分に手が負えない時は、二次診療や専門の病院に紹介する」こともあるが、すっかり地域に溶け込んだ、頼りになる動物病院との評価は高い。

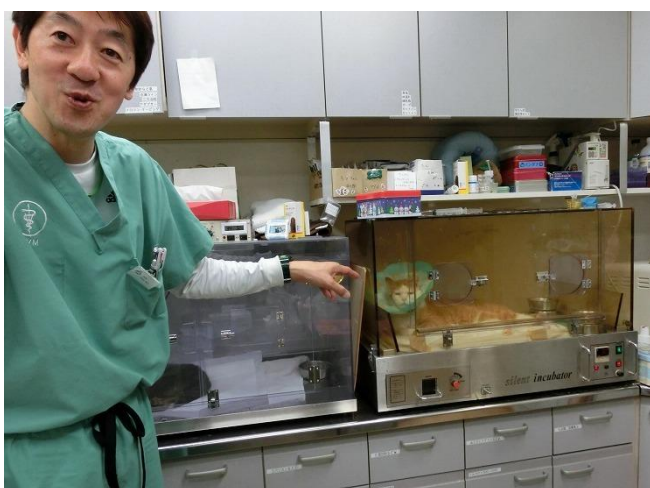
最初は2人で始めたのが、現在はドクター2人と美容サロンも併設・拡大したこともあって看護師、トリマーさんを加えて10人もの陣容にふくれあがった。

「夢中でしたね。病院にいない時は往診もしますし、とにかく休みも何もありません。今でも働きづめです」。学生時代にやっていた好きなテニスやスキューバダイビングなども封印、休みも取らずにひたすら動物の治療活動に専念した14年間だったという。

セカンドオピニオン外来を

15年目の節目を迎えるにあたって、今思い描いているのは「セカンドオピニオン外来」をはじめることだ。

「ペット医療に求めるレベルが大きく変わってきました。昔は、『先生注射でも1本うっというよ』と、自分の気休めみたいなことをおっしゃる飼い主さんも多かった。それが最近は人の医療レベルと同じような診療を求められている。家族の一員と言うことであれば当然ですね」



ペットも寿命が長くなれば、人間と同じような病気にさいなまれる。ペットでも総合医療的見地で診断していく必要もあるし、また複雑な病にはそれ専門に研究、治療するクリニックや大学病院もある。MRIやCTなどの最新鋭検査機器は、ど

この病院でも置けるわけではない。ペットの病に悩む飼い主に適切な助言や、具体的な病院の紹介が出来るそんな役割を果たして上げられればとの願いからだ。

「今は身体がいくつあっても足りません。自分の年のことも考えないとなりませんが、何とか飼い主さんの悩みの相談に乗ってあげたい。時間も治療費もかかるようになり、トラブルだって少なくはありませんから。適切な相談相手になればと思っているんです」。それが自分の使命感でもあり、責任感でもあるときっぱり。



昭和39年生まれの48歳。玉縄生まれの玉縄育ち。玉縄小学校から玉縄中学に。6年間の大学時代は青森で過ごす。自宅でも愛犬や愛猫に囲まれている。